

A study of painting and dance subjects for children with intellectual disabilities II : Current status and issues of art and dance classes at special school

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 朱音, 高橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00027842">https://doi.org/10.14945/00027842</a>

## 知的障害のある児童生徒を対象とした造形及びダンスの題材研究II

—特別支援学校における造形とダンスの授業づくりの現状と課題—

A study of painting and dance subjects for children with intellectual disabilities II

Current status and issues of art and dance classes at special school

山崎 朱音<sup>1</sup>, 高橋 智子<sup>2</sup>

Akane YAMAZAKI and Tomoko TAKAHASHI

(令和2年11月30日受理)

### 要旨

本研究では、知的障害のある児童生徒を対象として、図画工作科及び美術科と体育科及び保健体育科の表現領域(造形及びダンス)に着目し、教科間の連携による題材開発及び研究等の可能性を探ることを目的としている。前報<sup>1</sup>では、特別支援学校において、より充実した造形やダンスの題材研究の必要性が示された。造形及びダンスを組み合わせた題材研究の実施にあたり、現場教員が感じている授業づくりの課題などの実態把握の必要性があると考えた。本稿では、学校現場の実態把握を行うために、前報後に継続して実施した造形とダンスを組み合わせたワークショップに参加した特別支援学校に勤務する現場教員（1名）を対象として、①鑑賞や造形及びダンスの実践の現状と課題、②鑑賞や造形及びダンスの指導の現状や指導上の課題や可能性、③造形及びダンスの教育的意義、④造形及びダンスの連携の課題や改善点、⑤造形及びダンスを組み合わせた授業実施に必要な教員の資質・能力について、質問紙調査と質問紙調査をもとにインタビュー調査を実施した。本稿では、①と②について報告と考察を行った。

### 1. はじめに

近年、各教科の関連を図りながら系統性や発展的な指導の必要性が示されており、そのためには、教員が各教科の教育内容を相互の関係で捉え、教育目標の達成のために教科など横断的な視点で題材開発及び研究を行い、カリキュラムを編成する力などが求められている。特別支援学校（小・中学部/知的障害）の新学習指導要領（平成29年4月告示）においては、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を三つの柱に整理されるとともに、教育課程の編成では、教科など横断的な視点をもってねらいを具現化したり、他の教科などにおける指導との関連付けを図ったりすることの重要性が示されている<sup>2</sup>。本研究では、知的障害のある児童生徒を対象として、図画工作科及び美術科と体育科及び保健体育科の表現領域（造形及びダンス<sup>3</sup>）に着目し、教科間の連携による題材開発及び研究などの可能性を探ることを目的としている。実践を通して、育成される資質・能力の整理や指導の在り方について、具体的な題材提案を検討

<sup>1</sup> 保健体育教育系列

<sup>2</sup> 美術教育系列

していく。前報では、障害者の文化芸術活動や学校教育におけるその現状について分析を行い、問題の所在を明らかにした。その後、著者らが実施した造形とダンスのワークショップの参加者を対象としたアンケート調査をもとに、「造形とダンスを組み合わせたワークショップの良さや魅力」「表現活動（造形・ダンス）の機会の必要性和期待すること」「今後の課題と学校教育への期待」に関して、考察を行った。

## 2. 問題の所在と研究目的

前報では、特別支援学校において、より充実した造形やダンスの題材研究の必要性が示された。題材研究の必要性は示されているものの、学校教育における題材開発及び研究や授業づくり・指導については、課題が多い。そのため、造形及びダンスを組み合わせた題材研究の実施にあたり、現場教員が感じている授業づくりの課題などの実態把握の必要性があると考えた。

そこで、本稿では、学校現場の実態把握を行うために、前報後に継続して実施した造形とダンスを組み合わせたワークショップ<sup>4</sup>（以下、ワークショップと記す）に参加した特別支援学校に勤務する現場教員（1名）を対象として、①鑑賞や造形及びダンスの実践の現状と課題、②鑑賞や造形及びダンスの指導の現状や指導上の課題や可能性、③造形やダンスの教育的意義、④造形及びダンスの連携の課題や改善点、⑤造形及びダンスを組み合わせた授業実施に必要な教員の資質・能力について、質問紙調査及びインタビュー調査をもとにインタビュー調査を実施した。本稿では、①と②について考察していく。③④⑤については、次報で報告を行うものとする。現場教員への質問紙調査及びインタビュー調査を通して、特別支援学校における造形及びダンスの題材開発に必要な視点を明確にし、今後の図画工作科及び美術科と体育科及び保健体育科の表現運動系及びダンス領域の題材開発及び研究の一助としたい。

## 3. 先行研究

前報で報告したワークショップの参加者へのアンケートでは、学校教育（授業しての造形やダンスの活動）への期待することとして、表現活動の特性である「自由に想像し創造する楽しさ」や「子どもの表現の可能性」などがキーワードとして挙げられた。また、学校教育では、表現領域の授業が画一的なものではなく、個の実態に応じつつ表現過程を重視したものであることが期待された。一方で、特別支援学校（知的障害）においては、表現活動における現場教員の学びの場が少ないことや、それに伴い児童生徒の実態に応じた題材研究や指導の在り方などについて課題があることが考察されている。また、学校教育における知的障害などの児童生徒を対象とした造形及びダンスの連携による実践研究については、過去5年間の学術論文を調査したところ、ほとんどみられない<sup>2</sup>。

近年、障害者による文化芸術活動が注目されるとともに、障害者による文化芸術活動を幅広く促進することが目指されている。学校教育においても、平成29年4月に告示された特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の中で、生涯を通して主体的に学んだり、スポーツや文化に親しんだりして、自らの人生をよりよくする態度を育成すること等が規定された。一方で、障害者の文化芸術の鑑賞活動及び創作活動の実態として、文化芸術活動への不参加や文化芸術活動への関心の低さが目立っており、その理由としては関心のなさが目立っている<sup>2</sup>。学校教育段階においては、各教科等を通して生涯学習への意欲を高め、積極的に文化芸術活動に親しみ、豊かな生活を営むことができるよう創意工夫を行っていく必要がある。

こうした現状からも、図画工作科及び美術科、体育科及び保健体育科の連携による題材研究や実践を通して、児童生徒に連携により育成される資質・能力の整理や題材の提案及び指導の在り方などについての検討が求められているといえる。

#### 4. 障害のある児童生徒の表現活動の重要性

障害のある児童生徒は、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことが多いと指摘される<sup>5</sup>。以前、著者（高橋）が実施した障害のある人を対象とした描画ワークショップの際、参加者Aの介助者（保護者）が、Aは障害によってできないことが日々蓄積していく中で自己肯定感がとても低くなっているとワークショップ中に話してくれたことを思い出す。図画工作科及び美術科、体育科及び保健体育科における表現活動（造形やダンスなど）では、障害の有無に関わらず、児童生徒が自己の身体を通して想像や創造を繰り返し、心や身体を開放しつつ、自分の思いを自由に表現したり、自身の存在を肯定的に確認したりすることが可能である。太田（2001）は、表現においては障害によるできない部分にではなく、その人のできる部分、すなわち可能性に光があてられると指摘し<sup>6</sup>、内田（2005）は『『表現』の種類は多種多様に、個人の数だけあって、その各々において個性をみることができます。なぜなら『表現』の元となる感情や、感情を生み出す対象・材料・用具は無数に存在し、それらの組み合わせは表現者である個人が行うからです。』<sup>7</sup>と表現の特質と魅力を述べている。また、元特別支援学校の教員であり、現在 waC<sup>8</sup>のスタッフ代表である吉田は、「アートの価値が『他と違う』という側面を持つならば、その言動が『普通と違う』という目で見られてきた障害のある人たちのその『違い』こそが、作品の中に『魅力』として表現され、価値あるものとして捉えられている」<sup>9</sup>と述べる。既に、前述したが前報でのワークショップの参加者へのアンケートにおいても、保護者が期待したこととして、「子供の表現の可能性」が挙げられた。表現においては、「個」の多様性（違い）が「価値あるもの」として重視され、その多様性（違い）が「個（自己や他者）の魅力」として認められる性質があるといえる。さらに内田（2005）は、「表現」や「鑑賞」を通して自己や他者の違いを認めることやその違いを持ちながら同じ社会で生存することを認めることの重要性を指摘する<sup>10</sup>。同様に、吉田も「メンバーにとってのアートは自分を自由に表現するものであり、様々な人と繋がるバトンでもある」<sup>8</sup>という。表現においては、児童生徒が言葉を越え身体を通して「もの・こと・ひと」と関わり、諸感覚を働かせながら創造の過程を他者と楽しんだり、創意工夫を行い自己実現したりすることも可能である。ここでいう「表現」は、美術科教育における「表現」を指しているが、保健体育科教育の表現運動系及びダンス領域における「表現・創作ダンス」においても、同様のことがいえよう。保健体育科教育の中でダンスは、競争を目的とするスポーツとは異なり、自由にイメージして表現することに目的がある。このイメージは、子供の内にあって個別的であり、動きや表したいことも個々に多様であることが特徴である<sup>11</sup>。つまり、美術科教育の「表現」とは表現方法は異なるが、その性質も障害のある児童生徒の表現活動の重要性や可能性も同じといえよう。

#### 5. 特別支援学校における造形とダンスの授業づくりの現状と課題

##### (1) インタビュー内容

インタビューは、質問紙（10項目）<sup>12</sup>を事前にメールで当該教員に送付し、その内容につい

て、直接聞き取りを行う方法（半構造化インタビュー）で実施した。聞き取りの際には、音声録音を行った。本調査分析には、本質問用紙への回答と音声録音を文字起こししたデータを使用した。

## （2）対象者及び調査場所・時期

調査対象は、ワークショップに観察者として参加していた特別支援学校（小学部：知的障害）の教員1名（特別支援学校における教職経験年数：12年）とした。調査は当該教員の赴任校で実施し、調査時期は2019年4月19日（金）であった。

## （3）分析方法

インタビューの分析方法として、事前に作成したフォーマットに文字起こししたデータを分類し、その実態や傾向などを分析する方法を用いた。文字起こししたデータは、同一の内容をひとつのまとまりとし、フォーマットへの分類を行った。

本分析で用いたフォーマットは、先行研究<sup>13</sup>において、授業者が自身の授業づくりに対する実態把握や考えの明確化、授業者の授業に対する考え方の変化や授業過程における気づきなどを、各自がフィードバックするために作成したものである。フォーマットは、授業づくりの要素となる「授業実践」「教科連携」「子供理解」「教員自身の努力」が項目として挙げられている。さらに、「授業実践」については【目的】【内容】【方法】【過程】【評価】に細分化されている<sup>14</sup>。そのため、本インタビュー内容を分析する際に使用することで、現場教員が捉えている授業の視点などが明確になると考えた。なお、分類結果の内的妥当性を高めるため、2名の研究者（美術教育、舞踊教育）によるトライアングレーションを行った。

## （4）インタビューの結果及び考察

### 1) 鑑賞の実施及び課題の現状

インタビュー結果（斜体で示す）より、鑑賞の実施の現状（一部）は下記の通りである。Sはインタビュー対象者（特別支援学校教員）、Tはインタビュアー（筆者・美術教育）を示す。

*S: 2点あるなと思ったのは、授業の中で自分たちの作った作品を鑑賞するということでは、小学部のことで書いてあるのですが、小学部低学年だと、作品で遊びながらそれが鑑賞みたいな感じで、作ったものとして大きなトンネルをくぐってみるとか、自分たちの作ったものを触ってみるとか、そういったことを鑑賞にしている。それで好きなことを伝えるだとか。だんだん高学年になっていくと作ったものを互いに見合いながら、自分が工夫したところはどこだよ、好きなところはどこ。友だちの作品でいいところはここ、というのをやっています。*

*S: もう一点は、導入の際に、今まで作られていた作品を見ることです。実物であったり、印刷されたものやテレビ画面で、画家の作品を見たり、色や模様の気付きを促して、作品作りへといったところを、中学年、高学年では取り入れたりしてました。けれどそんなにガッツリ何かをというところは、今までやってはいなかったかなと思います。*

*T: 画家の作品というのは、たとえば平面のプリンターとか、立体とか、それは様々？*

*S: 去年やっていたのは、自画像を描く時に、ゴッホとかを見ながら、後ろの色でイメージ違*

うねとか、なんかぐるぐる模様があるねとか、そういうのにみんな気付いて、自分だったら何色にしようかな、楽しい感じだからこういう色にしようとか。ぐるぐる模様にしたら外で遊んでいるみたいな感じになったとか。

これらの回答を踏まえ、鑑賞の実施及び課題の現状について、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表1に示す。なお、表内に示すインタビュー内容は、筆者らにより要約したものである。インタビュー結果は、「授業実践」【目的】【内容】【方法】、「子供理解」に分類された。

【内容】や【方法】から、特別支援学校における鑑賞の実態の現状として、鑑賞の対象は「自分が創った作品」と「既存の作品」という2点の傾向があることがわかった。また、鑑賞では、鑑賞と表現と関連づけながら学びを深めている様子が示された。それは、【目的】にも顕著に表れている。鑑賞と表現を相互に関連させながら、児童の想像を広げたり、色や形などの造形要素に気づかせたりしており、鑑賞と表現を相互に関連付けた学習の効果が認識されていることが分かる。一方で、鑑賞と表現の活動が独立して実施されていることも多く、その点が課題と

表1 鑑賞の実施及び課題の現状

	KW	語句説明	現状	課題
授業実践	目的	授業目的について	色や模様の気づきを促すために、中学年・高学年で実施していた。 背景色や模様によるイメージの違いに気付かせる。 画家の作品を見ることは気づきにつながり、それが作品創りへとつながる。 子どものイメージを具現化する。	鑑賞と表現が独立している授業が多きことが現状であり課題である。鑑賞と表現の相互の関連を図り、リンクさせることが大切である。また、鑑賞したことを子どもたちは自分達だけでは表現へとつながらないため、教師は丁寧に確認しながら活かしていくような指導が必要といえる。
	内容	テーマなど	美術の授業の中で、自分達の作った作品を鑑賞する。	
			美術の授業の導入に、今まで作られていた作品(実物、画家の作品を印刷物やテレビ画面等)を鑑賞する。色や模様の気づきを促すために、中学年・高学年で実施していた。昨年は自画像を描くためにゴッホの作品を鑑賞し、背景色や模様によるイメージの違いに気付かせる。	
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について	作品を撮影した写真を見て互いに鑑賞し、面白いところや着目したところ伝えあう活動をした。	
			画家の作品を見ることは気づきにつながり、それが作品創りへとつながる。自分のイメージと合わせることで、イメージの膨らみが生じる(高学年)。	
			画家の作品を鑑賞することは気付かせるための手立てであり、誘導ではない。子どものイメージを具現化するために、単語やイメージ、色、形などのキーワードの提示し子どもたちに気づきが生まれるように指導する。	
過程	カリキュラムや授業構想(計画)について			
評価	授業前・中・後の評価について			
子供理解		子供理解について	イメージが膨らむ子どもと膨らまない子どもがいる。イメージが膨らまない子どもに対しては、画家の作品から色や模様などについて気がつかせ、それと自分のイメージを合わせることで膨らませるような手立てが必要である。	
教科連携		教科連携について		
教員自身の努力		研修・教材研究等		
その他		上記以外		

して挙げられている現状も明らかになった。

## 2) 造形の実施及び課題の現状

造形の実施及び課題の現状について、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表2に示す。インタビュー結果は、「授業実践」【目的】【方法】【過程】、「子供理解」に分類された。

図画工作科における造形活動では、児童の実態（興味関心や知識・技能など）をもとに、段階的に目標を設定し、題材の選定や指導の工夫が行われている実態が示された。児童の実態に合わせた目標や活動内容の系統性が意識されており、さらに生活や他の教科や活動との関連性

表2 造形の実施及び課題の現状

	KW	語句説明	現状	課題
授業実践	目的	授業目的について	図工では、段階ごとの系統性や児童の興味、生活やほかの教科との関連性等から題材を設定し、目標をもって取り組んでいる。造形遊び(素材)から始まり、色々な題材・用具に触れていくことで図画工作の表現になっていく。 目標は、それぞれの子どもに合わせて設定する。	授業と遊びの違い。好きに描いているが遊んでいるような子どもを、授業としてどのように評価するのか。
	内容	テーマなど		
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について	材料用具の使い方を、子どもに変える(パレットの使い方、混色の仕方など)。	
	過程	カリキュラムや授業構想(計画)について	自分の思いを表現する際に、必然的に技能が必要になる。そのため、知識・技能→思考・判断・表現→知識・技能→・・・といったスモールステップとスパイラルステップが大切である。必要なことを繰り返していくことで、だんだんと自分で考えたり選択して表現ができるようになる。	知的の高等部などは、学年全体で美術の授業を実施していた。子どもの段階によって付けたい力がついていたのか、子どもの実態に合っていたのか。子どもが何を学んでいくのかを考える必要がある。
			低学年は、生活や季節、他の教科との関連性等から題材を設定し取り組んでいる。中学年は、自分のことや周りの物を作る等、題材の広がりがある。自立活動と図工との絡みも生じる。例えば、ちぎって貼ることを繰り返すなどの教員の知識は、図工の授業づくりにも生かされている。 目標に関係するキーワードを明確にし(低学年で生活と季節、中学年で自己と他者など)、それに合った素材や活動を考えることで、カリキュラムのつながりを考えやすくなる。	楽しいだけの授業ではなく、どこまで技能を身に付けさせるのか。子どもたちのやりたいことをするための知識・技能とは何か。
評価	授業前・中・後の評価について			
子供理解	子供理解について	低学年の児童の中には、絵の具やのりの感触に過敏になる児童もいる。しかし、生活経験や興味の広がり、発達段階や興味に合わせた活動内容等により図工にも自分から取り組めるようになった。集団の実態に合わせて使用する素材などを検討する。	子どもの発達によって、自分の表現したいものと自分のやっていることに乖離が生じる子どもがいる。その場合、恥ずかしがったり嫌がったりする子どももいる。	
		中学年・高学年は素材が広がり、身近な物や普段使わないものも使用する。絵の具の混色など、知識・技能についても中学部に向けて育んでいく。混色の概念を理解することも難しいが、パレット等の使用の仕方個々異なる。		
		小学部は、自分達の興味があることが重要である。そのため、題材の選定も子どもの興味があるものを設定する。授業の見通しを持たせる。これらのことにより、目標に追従ことができ、身に付けたい力の育成につながる。		
教科連携	教科連携について			
教員自身の努力	研修・教材研究等			
その他	上記以外			

も意識され題材が設定され授業が取り組まれていることが示された<sup>15</sup>。課題には、個々の実態やニーズに応じた目標や題材設定、学習内容の吟味、指導方法の工夫、評価方法などが挙げられた。

### 3) ダンスの実施及び課題の現状

ダンスの実施及び課題の現状について、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表3に示す。インタビュー結果は、「授業実践」【目的】【内容】【方法】、「子供理解」、「その他」に分類された。

現状には、授業を実践するにあたり教員の「ダンス」と「身体表現」の言葉の理解が課題として浮き彫りとなった。「ダンス」は教員が振り付けを決め、子どもは決められた振りを覚えて踊ったりリトミックのように決まった運動を反復したりすることがイメージされていた。対して「身体表現」は表したいイメージを身体で表現することであり、自由な動きが現れるとイメ

表3 ダンスの実施及び課題の現状

	KW	語句説明	現状	課題
授業実践	目的	授業目的について	運動会、朝スポなどで、決まった振り付けのあるダンスをみんなで踊った経験がある。リズムに合わせて体を動かすこと、楽しみながら体をいっぱい使って踊ることが目的となっている。	自由な身体表現は苦手な子どもがいる。自由とは何か、なにをしたらいいのかわからない子どももいる。どうい目標で活動が良いのかを考える必要がある。
	内容	テーマなど	昨年度、中学年・高学年の体育で身体表現を行った。動物や風、氷などのイメージにあわせ、真似をして体を動かした。 低学年はリトミックの活動を行っている。絵本と絵本の曲を用いて、象の動きを体で表現する活動を行った。そういった活動の積み重ねが、色々なイメージにつながっていくだろう。	
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について	イメージすることが難しい子どももいた。逆に、象、風などのイメージを伝えただけで自分なりの身体表現ができる子どももいる。できない子どもは、イラストを提示するなどの手立てにより、自分の知っているものや好きなものとイメージが合えば身体表現につなげることができた。	低学年の子どもの中には集団の活動参加に課題があることもある。個別の目標に合わせての支援が必要になることが課題である。
	過程	カリキュラムや授業構想(計画)について		
	評価	授業前・中・後の評価について		
子供理解	子供理解について		朝のスポーツの時間で毎日リズムダンスを行った。好きな子どもが多く、曲が鳴るとすぐに覚えたり楽しく体を動かすことができた。	
			低学年はリズムに乗ることが好き。自立活動においても音楽を使っていることから、馴染みがある。手立てによって、子どもたちはリズムに乗ることを楽しむことができ。	
			高学年になると恥ずかしさが出てきて、みたものをそのまま表現するようになる(模倣)。対して低学年は、捉えたイメージから自分なりの表現をすることができる。	
教科連携	教科連携について			
教員自身の努力	研修・教材研究等			
その他	上記以外		ダンスを踊る場合は、小学部では運動会とふようまつりという学校発表会である。振りを教員が創りみんなで踊る。	

ージされていた。なお、ダンスと身体表現は本来同義であり、ダンスとはイメージを表現する

こととリズムに乗って律動の快感を得ることの両面が存在する<sup>16</sup>。そのため、双方の特徴を生かしたカリキュラム設計が今後の課題ともいえる。「子供理解」では、教員が児童の実態をしつかりと捉えている様子が見て取れる。課題には、児童の実態に合わせた目標設定や内容設定、指導・支援の在り方が挙げられた。

#### 4) 鑑賞の指導の現状及び指導上の課題や可能性

鑑賞の指導の現状及び指導上の課題や可能性について、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表4に示す。インタビュー結果は、「授業実践」【目的】【方法】に分類された。

鑑賞の【目的】では、鑑賞活動を通して児童が気づくことや興味を持つことが重視されており、その発見や興味の広がりや児童の表現の豊かさを広げていくことが目指されていることが示された。前述した「鑑賞の実施及び課題の現状」(表1)においても、鑑賞と表現を相互に関連付けた学習のあり方が重視されていたが、表4の【目的】においても、鑑賞の目標と表現の目標の連動性が感じられる結果となった。そのため、【方法】には低学年ならば自他の作品を鑑賞して互いに言葉で伝え合うことよりも、自らの感覚を研ぎ澄ますことができるように指導方法が工夫されている。それは高学年においても同様であり、鑑賞の指導方法の重点は、児童の表現の豊かさを児童が諸感覚を働かせたり、教員が児童の個性を価値づけたりすることによって広げ、「自己実現」(表現)に繋げていくことにあるといえる。これらは指導上の現状と

表4 鑑賞の指導の現状及び指導上の課題や可能性

	KW	語句説明	現状	課題	可能性
授業実践	目的	授業目的について	鑑賞することで、何かに気がついたり発見して興味が広がることは、表現の豊かさにつながる。		
	内容	テーマなど			
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について	低学年は特に遊びと一体化した鑑賞がよい。教員の見取りは、触る、見るなどの五感を使っている場面を鑑賞と捉える。決して言語表現だけでない、感じ取る時間も鑑賞である。		
			高学年では、子どもが注目した場所がわかるようにする。教員の見取りの視点ともいえる。例えば子どもがipadを使用することで、教員と共感することができる。子どもの言葉を代弁して教員が伝えることにより、子どものイメージをさらに広げていくことができる。注目するもの(描かれているもの、色、形等)や気持ち等を、選択肢として視覚的に示すことで、言葉が難しい子どもにとってはわかりやすい。		
	過程	カリキュラムや授業構想(計画)について			
評価	授業前・中・後の評価について				
子供理解	子供理解について				
教科連携	教科連携について				
教員自身の努力	研修・教材研究等				
その他	上記以外				

して述べられており、課題については挙げられなかったことから、現状の指導方法が十分に発揮されていることが推察される。

#### 5) 造形の指導の現状及び指導上の課題や可能性

造形の指導の現状及び指導上の課題や可能性について、インタビュー内容をフォーマットに分類した結果を表5に示す。インタビュー結果は、「授業実践」【目的】、「教員自身の努力」に分類された。造形活動では、鑑賞とは異なり「指導上の可能性」が指摘された。

【目的】に示されている「やりたいことに向かっていくためのスモールステップとスパイラルアップのように、一つ一つが積み重なって向上していく」の回答からも分かるように、「造形の指導上の可能性」として、【目的】である自己実現のための「願いや思いの創出」と「手段（知識・技能）の習得」のバランスの取り方（指導の在り方）が指摘された。児童の豊かな創造のためには、想像を具現化するための手段（知識・技能）に関する指導のあり方が指導上の可能性として示された。さらに、児童の豊かな表現を引き出すためには、【教員自身の努力】が必要であることが示されており、自身の「知識・技能の獲得」や児童の実態に合わせた「指導技術の向上」などが指導の可能性として示された。

表5 造形の指導の現状及び指導上の課題や可能性

	KW	語句説明	現状	課題	可能性
授業実践	目的	授業目的について			児童の興味、やることわがわがすることが大切。それがあって初めて付けたい力につながっていく。やりたいというのがあった時に、どうしてもやりたいことに向かって知識・技能が必要になることから、スモールステップとスパイラルアップのように、一つ一つが積み重なって向上していく。やりたいことが出来るようになっていくというのが理想。
	内容	テーマなど			
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について			
	過程	カリキュラムや授業構想(計画)について			
	評価	授業前・中・後の評価について			
子供理解		子供理解について			
教科連携		教科連携について			
教員自身の努力		研修・教材研究等			教員の知識・技能と指導内容や展開、指導技術の引き出し、見取り方、評価の仕方が多様であると、子どもの豊かな表現を引き出すことができる。加えて、教科において教員の良さが活かしているかも大切。子どもの1人1人のニーズに合わせた指導のやり方が特別支援学校では特徴といえる。
その他		上記以外			

#### 6) ダンスの指導の現状及び指導上の課題や可能性

ダンスの指導の現状及び指導上の課題や可能性について、インタビュー内容をフォーマット

に分類した結果を表6に示す。インタビュー結果は、「授業実践」【目的】【内容】【過程】に分類された。

「ダンスの実施及び課題の現状」(表3)においても、「ダンス」と「身体表現」の言葉の理解が課題として挙げられたが、【目的】の「身体表現とは何か。どういう子どもの姿を目指しているのか」の回答からも、「身体表現」に関する教員の理解が課題として挙げられることがわかった。それは、【過程】に示されたように、特別支援学校においてダンス(身体表現)の目標や活動内容の系統性が明確にされていないという現状の課題が要因であると推察される。「造形の指導上の可能性」(表5)に示された造形の指導と同様に、ダンス(身体表現)の指導においても児童の多様なイメージを具体化させ身体で表現させるための手段(知識・技能)に関する指導の在り方を明確にすることが、身体表現における自由の担保に繋がることが示唆される。また、【内容】の「可能性」に示されたように、リズムカルなダンスと自由な身体表現を組み合わせ

表6 ダンスの指導の現状及び指導上の課題や可能性

	KW	語句説明	現状	課題	可能性
授業実践	目的	授業目的について	身体表現とは何か。どういう子どもの姿を目指しているのか。		
	内容	テーマなど	リズミカルな活動や決まった動きをする曲に合わせたダンスは取り組みやすい。		知っている曲・ダンスを導入として扱い、そこから知っているものなどをみつけてイメージをふくらまして作品創りにつなげ、最後に鑑賞をしながらダンスにもどるという展開が考えられる。このように作品づくりにつなげたり、作ったものと一緒に身体表現することで、子どもたちがその世界に入り込むことができるのではないかと。
			身体表現とは、リズムとは異なり自由で表現的。自分の思いや感情を表現するもの。リズムは体操と似ていて定型の振り付けがあり、そこにリズムがある。子どもの興味は身体表現の方が難しい。		
	方法	教材教具の工夫、指導方法の工夫について		子どもの自由な身体表現を教師がどのように価値づけするのか。教師の指導技術の課題。	
	過程	カリキュラムや授業構想(計画)について	ダンス(身体表現)の系統表はない。発達段階にあわせた系統表があれば、題材づくりに活きるだろう。	自由の難しさが課題。子どもの興味や授業の見通しとともに、その中で身体表現における自由をどう担保するのか。カリキュラム、題材、子どもの実態全てにかかわる課題。	
	評価	授業前・中・後の評価について			
子供理解	子供理解について				
教科連携	教科連携について				
教員自身の努力	研修・教材研究等				
その他	上記以外				

せる、また鑑賞と表現の連動性を応用してダンス作品の創作と鑑賞を組み合わせるといった新たな授業展開が提案された。今後は、このような実践を行っていくことで、ダンス(身体表現)

の目的や内容が整理されていき、子供たちが「自由に身体で表現する」機会が保障されると推察される。

## 7. おわりに

本稿では、特別支援学校における造形及びダンスを組み合わせた題材研究の実施を目指し、現場教員が感じている造形及びダンスなどの授業づくりの課題などの実態把握の必要性から、ワークショップに参加した特別支援学校（小学部：知的障害）現職教員1名を対象として、質問紙調査とインタビュー調査を実施した。その結果、特別支援学校における①鑑賞や造形及びダンスの実践の現状と課題、②鑑賞や造形及びダンスの指導の現状や指導上の課題や可能性について、その傾向が明らかになった。

①と②の考察を通して、図画工作科の鑑賞及び表現活動は相互に関連させながら実施されている傾向が強く、体育科の表現運動領域（表現）ではそうした鑑賞と表現の関連性はほとんど見られない傾向にあった。図画工作科においては、鑑賞と表現を相互に関連させながら、児童の資質・能力を育む傾向にあり、さらに、その学習の効果も認識されていた。学習効果が理解されているからこそ、課題として鑑賞と表現の活動が独立して実施されていることが挙げられていたといえる。

また、両教科ともに造形とダンスの活動において、児童の実態把握の重要性が理解されており、図画工作科では児童の実態（興味関心や知識・技能など）をもとに、段階的に目標や題材が設定され、指導の工夫が行われていた。鑑賞及び表現の活動において、児童の実態把握は欠かせないものであり、そのことを現場教員も認識しているといえる。重要性を認識しているからこそ、体育科において児童の実態に合わせた目標設定や内容設定、指導・支援の在り方が課題として挙げられたといえる。また、両教科ともに、児童の豊かな創造のためには、児童生徒の多様なイメージを具現化させ身体で表現するための手段（知識・技能）に関する指導のあり方が指導上の可能性として示された。児童生徒の豊かな創造のためには、想像とそれを実現する手段のバランスが重要だと考えている傾向にあった。さらに、体育科では、鑑賞と表現の関連を持たせた新たな授業展開が提案され、その可能性が示された。

先述したが、図画工作科及び美術科や体育科及び保健体育科における鑑賞や表現の創造活動は、表現方法は異なるが、その性質も障害のある児童生徒の表現活動の重要性や可能性も同じ意味を持つものであるといえる。しかし、教科により実践の現状や課題について差が生じた視点もあった。特に体育科の表現運動領域では、「身体表現」に関する教員の理解が課題として挙げられた。造形活動と身体表現活動は共に「表現」であり、児童生徒が言葉を超え身体を通して「もの・こと・ひと」と関わり、諸感覚を働かせながら創造の過程を他者と楽しんだり、創意工夫を行い自己実現したりすることが可能である。こうした教科や活動への現場教員の理解が重要であるといえる。

次報では、引き続き、同教員に実施した質問紙調査とインタビュー調査をもとに、「③造形及びダンスの教育的意義」「④造形及びダンスの連携の課題や改善点」「⑤造形及びダンスを組み合わせた授業実施に必要な教員の資質・能力について」の考察を行っていく<sup>17</sup>。本考察で明らかになった現状や課題などと合わせて、造形及びダンスを組み合わせた題材研究に活かしていく予定である。

## 註

- <sup>1</sup> 高橋智子 山崎朱音「知的障害のある児童生徒を対象とした造形及びダンスの題材研究Ⅰ：造形とダンスワークショップを手がかりとして」静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇、50、pp. 137-152、2018
- <sup>2</sup> 文部科学省「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）平成30年3月」開隆堂出版、2018
- <sup>3</sup> 体育科・保健体育科の表現運動及びダンス領域を総称し、「ダンス」と表記する。
- <sup>4</sup> 前報の実践後、継続してダンスや造形（描画など）を関連させたワークショップに取り組んだ。本稿で報告するワークショップは、2019年の1月に静岡県の薫科生涯学習センターで実施したものである。ワークショップのタイトルは、「つくる・おどる・つながる—造形とダンスの楽しい世界—」（全1回）とした。
- <sup>5</sup> 文部科学省「特別支援学校学習指導要領 解説 知的障害者教科等編（上）（高等部）、ジース教育新社、p. 29、2019
- <sup>6</sup> 教育と医学の会「教育と医学」慶応義塾大学出版会株式会社、2001、p. 16
- <sup>7</sup> 内田裕子 高橋智子「美術科教育の意義を理解するための教師用ワークシートの作成—2004年度教育センター研修用資料作成を手掛かりにして—」大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要、22、p. 111-112
- <sup>8</sup> waCは、「wonderful art COMMUNITY（ワンダフル アート コミュニティ）」の略で、2012年から、特別支援学校卒業生の素敵なARTと地域社会や企業、ショップなどのたくさんの人をつないでいくコミュニティとして発足。現在、毎月一回の制作日を設けて活動中。waC HP [http://wac.is-mine.net/ren\\_zheHP/Welcome\\_waC.html](http://wac.is-mine.net/ren_zheHP/Welcome_waC.html)（2020. 11. 1 確認）
- <sup>9</sup> 静岡県障害者文化芸術活動支援センターみらーと「平成30年度静岡県障害者文化芸術支援センター運営事業成果報告書 風を創るひとたち」平成31年3月発行
- <sup>10</sup> 同上、p. 113
- <sup>11</sup> 村田芳子「楽しい表現運動・ダンス」小学館、1998
- <sup>12</sup> 質問項目は、①特別支援学校（以下知的）の子に対する鑑賞活動の現状について、②知的の子に対するダンスの現状（実施状況及び課題など）について、③知的の子に対する造形の現状（実施状況及び課題など）について、④知的の子に対する連携（鑑賞、ダンス、造形）による活動の現状について、⑤知的の子にとっての鑑賞、ダンス、造形、それぞれの教育的意義及び連携による活動（表現と鑑賞の一体化）に関する教育的意義について（実施前、実施後）、⑥鑑賞活動の指導上の課題や可能性について、⑦ダンス活動の指導上の課題や可能性について、⑧造形活動の指導上の課題や可能性について、⑨連携プログラムを学校教育において実施する際の改善点や可能性について、⑩「⑨」の改善点や可能性を実現するために必要な取り組み方について（現場教員の授業づくりにおける悩みなど）の10項目であった。
- <sup>13</sup> 高橋智子、村上陽子「学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試み no. 5—図画工作科・家庭科における連携授業の構想提案—」静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇、45、pp. 191-200、2014
- <sup>14</sup> それぞれの項目は次のように説明される。「授業実践」【目的】：授業目的について、【内容】：テーマなど、【方法】：教材教具の工夫、指導方法の工夫について、【過程】：カリキュラムや授業構想（計画）について、【評価】：授業前・中・後の評価について、「子ども理解」：子ども理解について、「教科連携」：教科連携について、「教師自身の努力」：研修・教材研究等。
- <sup>15</sup> 調査対象である現場教員の赴任校では、「授業のねらいと指導内容の明確化」を目指し、小学部、中学部、高等部において、図画工作科や美術科を対象として授業研究を行っていたため、今回の回答には、その影響もあると考えられる。
- <sup>16</sup> （社）日本体育学会「スポーツ科学事典」平凡社、2007
- <sup>17</sup> 本研究の調査対象者は1名であったため、今後は調査対象者を広げ、本稿のデータと合わせ、より信憑性を高めていく予定である。